

いささかの回想

小宮, 正弘 / KOMIYA, Masahiro

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究 / 沖縄文化研究

(巻 / Volume)

12

(開始ページ / Start Page)

413

(終了ページ / End Page)

424

(発行年 / Year)

1986-03-13

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002550>

いささかの回想

小宮 正弘

中野好夫先生は鶯のように善福寺に巣をくついている。松が陰をつくる玄関先は、いつ行ってもしんと静まり返っている。ブザーを押すと大抵はお手伝いさんが、びっくりしたような面持で堅牢な戸を開けてくれるが、ひと頃はその人がよく替わった。それでいつもぼくのほうが先輩格だったが、といて先輩風を吹かす余裕などあるわけがない。相手は何といっても鶯の門番だ。

毎週月曜日午前中は、いつ頃からか約束なしに訪れるようになっていた。雨の日も、風の日も、雪の日もだ。はじめはさすがに事前に電話はしたが、なにしろ毎回なので、ものものしいのでやめてしまった。「蘆花徳富健次郎」の雑誌連載のときだったろう。

先生が応接間に入ってこられると、反射的にぼくは立って一礼する。先生はほとんどいつも和服だ。入って来たかたもまず変わらない。「う、う」と、低くなにか挨拶を表わすかにして、席につく。タバコをくわえる。不機嫌な顔つきのときもある。が、きまってしだいに、呵々大笑の座談になる。

先生はところでけっしてタバコの灰に頓着しない。灰が落ちそうなのを呵々大笑すると、ぼくはつ

いたバコ先の長い灰が気になって、チラチラと眼がいくのだが、先生はいっこうに気にかけない。灰が、やっぱり、落ちるときもある。

先生の話しぶりは概して断片的で、余分なところは周知、とでもいうのか、よく言えば、まあ、相手の知見への信頼、悪く評せばはなはだ自己本位的なところがあつた。人物月旦にしてからがこうだ。阿部真之助、うん、あれは恐妻やつたなあ、アッハッハッハ、こう伊香保のな、ちいさいカワラケを売ってつてな、ぶつけるのや、アッハッハ。またその該博な知識は、「あの例の、あれな」と突然くるのが困る。それが字義通り古今および東西にわたるのだから、脇の下に汗が出るときもある。なにしろ「ほとんど無尽蔵の歴史的知識の蓄積を感じますね」と丸山真男氏も言っているくらいで、たしかにそれは著作集を多少でものぞいたほどの人なら素直に納得がいくだろう。文章にはさすがに影をひそめるものたとえば、「例の『赤蝦夷風説考』の著者工藤平助が……」などとあれば、例の、というところに伏目がちになる読者だっているのではなからうか。ところでカワラケの一件というのも、実はこうなのだ。

大宅壮一の発案で、例の阿部真之助を会長とする恐妻会が、上州は伊香保に恐妻の碑というのを建てようということになったらしい。碑の前に茶店を出し、茶焼の盃なんかを一個いくらかとかで売って、日頃恐妻に悩まされる男たちに、碑面に向かって力いっぱい投げつけさせようというのだ。だが、やんぬるかな、この計画、地元婦人会の猛反対でオジャンになった、とまあそんなような話であ

る。

ともかく先生との談話には、ぼくにせよたまには社会の大小の問題をおたずねしなかつたわけでもないのだが、どう思い出してもおおよそ深刻ということがなかった。せいぜいが、慨嘆というでもない、苦々しげな評言がはさまるくらいであった。

「蘆花」の雑誌連載中は、何度か取材のお供をした。逗子があり、伊香保があり、京都あり、九州があった。近くは蘆花公園。ある日曜日、先生と二人して、荻窪駅前からタクシーに乗った。後部座席に腰をおちつけ、蘆花公園と言うと、運転手は行かないと言う。その瞬間、先生は間髪入れず声を放った。「乗車キョヒやな」そしてぼくに「番号をひかえておけ」と下命した。見事な呼吸である。車は、文字通り風をくらって退散した。

帰途また荻窪駅前に戻った。すでに街に暮色あり、トンカツでも食っていこうという。滅多ないことなので驚いたが、たぶん勤勉な先生としては編集者も日曜働くところがはなはだ欣快であつたらしい。これはのちの話だが、社が土曜休みになり、当日は電話交換手の声がテープでただ繰り返されるばかりとなると、先生はある日ついに怒鳴つたものだ。「君んとこのあのテープはなんだ！」一平社員のぼくがどう答えたかは、さっぱり忘れた。ともかく、トンカツ屋に入り、小さなカウンターに腰掛けると、まずお酒を一本ずつ先生は注文した。先生から食事に誘われたことなど皆無だったから、

豪勢だなどぼくは内心また驚いた。その一本が終ると先生はさっさとメシとトンカツ、豚汁に向かい、旨いというでもなし、不味いというでもなし、まるで草食動物が食物連鎖の一翼を無心に担うように黙々とただ済ませた。ぼくは先生の生の、自然摂理との一体をほとんど直感的に確信したくらいだが、たしかに先生には、およそ衣食住というものの価値に必要以上むやみにふりまわされることがないというところがあつたように思われる。

やがてぼくが雑誌編集部をクビになり外国の長期滞在に遣られることになったとき、先生はぼくを慰勞してやろうとの心算が動いたものらしい。事實はそうでなくても、これはぼくの美しき誤解としておきたい。ともかく一週間余の九州取材旅行を企画し、ぼくに同行を命じた。一九七一年五月のことだ。羽田から福岡まで飛ぶのだが、まだ飛びたない飛行機の窓からぼくがやたら写真を撮るので、先生はやおら、飛行機ははじめてか、と問うた。うなずくと、そうか、わしははじめは太平洋横断の、あれは日航の初飛行やった、とこともなげに言った。ぼくは、へえっと、カラッと晴れた戦後の空を思い遣った。

このときの九州旅行は福岡から熊本、水俣、桜島、鹿児島は大隅半島最南端の佐多岬まで、蘆花の跡を追って長途移動したが、先生が行く先々の土壌、植物相に知見、関心をともっているらしいのが実に印象的であった。土地の人々や運転手などとのさりげない会話、地勢、風景を見やっつて漏らす言葉などからもそれはうかがわれた。それはあのワイマル公園を出奔しひたすら南へ向かう「イタリ

「ア紀行」のゲーテが、アルプス、ブレンナー峠を越えるときの、植物、土質、鉱物への微細な関心を思わせるものがあったが、どこかあれよりもっと農本主義的な色彩の濃いもののように思われた。無機的なものへの直接の関心というより、あくまで人間と土地とのかわり、生産の媒介としての土地や植物への関心であるようだった。もっとも、花そのものもお好きであった。鹿児島県内の、途中一カ所、蘆花とはまるで関係のない小さな植物園ようのところにわざわざ廻り道して立寄ったのが、あとあとまで妙に記憶に残ったが、あれは何だったのか。亜熱帯性の花の苗木がめずらしく、そこでぼくは先生のと自分のと、一株買って見たのだった。

それにしても、「蘆花」連載中の先生は、多忙を極めておられたはずである。雑誌「展望」の連載開始は一九六八年十月号だが、完結まで五年七カ月かかる。その「展望」の開始と同じ号からの「学鑑」に「英文学夜ばなし」を七一年四月号までつづける。むろんとうていそればかりでないのは著作目録にでもゆずって省略するほかないが、実にこの期間に東京都政の雑事はともかく（これもひと頃はほんとうに時間を費消されていたのをぼくは知っている）、それはともかく沖繩問題への取組みがある。一九五六年以来五度目の渡航申請ではじめて沖繩を訪れることができたのは、「蘆花」連載開始直前の六八年八月だ。それから七二年五月の沖繩施政権返還までを仮にとっても、少なくともその間ほぼ四年近く、すっぱりと激動期の「沖繩」と「蘆花」は重なる。このどちらひとつとっても、容易なことではなかったはずだ。むろん、「沖繩」のほうの主要論説は、雑誌「世界」に拠っていた。

ところで先生が沖縄のことで「わしのやれるのはそのへんだけだ」と謙遜しておられた沖縄資料センターの開設は一九六〇年、同資料の法政大学内への移管は一九七二年だそうだが、そのあいだ「蘆花一時代のぼくが一度、資料の収集そのほか資金のほうもたいへんでしょうね、とおたずねすると、「うん、まあ、原稿料はだいたいそれで消えるわな」と話されたのを覚えている。先生ともなるとわが「展望」の稿料だけでも、結構な額である。ぼくはこのひとの金の遣い方には見習うべきところがある、と厳肅に思ったものだ。トンカツに酒が一本ついたのを豪勢だなど思ったのはどこか若年の不明で、恥じるべきであった。

当時は、ぼくの接するかぎりの仕事だけでも、月のまず半分はお会いして、それも調べて書かねばならぬような原稿を、ペラ五、六枚ずつというふうにしていたのだから、右に述べたようにそればかりでない先生は、繁忙を極めておられたはずなのだが、しかし不思議にいつも忙しそうではなかった。そのうえ朝早くからたまにゴルフには出かけるわ、相撲、高校野球などが始まれば連日テレビにかじりつくわで、いついつたいお仕事もなさっていたのか。いったいいつおやりになるんです？とうかがったことがある。「午前中とちょっとくらいだな、あとはもう疲れるわ」と実に簡単に言われるので、少々ぼくはあきれて、二度と聞く気も起こらなかった。

それが「蘆花」が二年半くらいになったとき、ある日先生がこう言われた。「ギボンをやっとってな、もうペラで四〇〇〇くらいにはなるな」ぼくは息を呑んだ。あのときほど呆然としたことはない。

「蘆花ばかり毎日やってるとたまらんからな」と言われたが、もうぼくはうわの空であった。

ぼくは雑誌を離れるとヨーロッパに飛んだ。そのある日、社の上司から手紙があった。——中野先生と会うと君の話がよく出ます。小宮君は天皇がパリに行ったとき、さぞかし日の丸の小旗をもって出迎えたにちがいない、というのが近来先生お気に入りの話柄で、まこと楽しげによく繰り返します、というふうな文面だった。見損っては困る、とぼくは当惑を禁じえなかったが、日の丸の小旗に何々大笑される先生のお顔の色つやまで、なつかしく思い出された。

断わっておくが、先生の天皇制観は一九四九年に発表された「一つの告白」に明らかで、その後基本のところはいささかも変わっていないと信ずるが、その先生のこれはジョークである。

ぼくは日本へ帰るとそれから数年はたぶん、先生とはあまり交渉はなかったように思う。それが社業も少々うんざりしていたので、ある日中野先生の著作リストをつくってみようと思ひ立った。われながら実に熱心に、夏の盛りを図書館などに通いつめ、カードをとってみて、ひとわり済ませたところである日その束を持参し善福寺を訪れた。応接間で、優に二〇センチほどの厚みのカードを差し出すと、先生は心底驚いたようで、「こ、これはみんなわしが書いたのか？」そうです、座談も少々ありますが。——ふうん、と今度は手にとって一枚一枚めくりはじめ、「覚えとらんなあ」「こんなのも書いてるのか」「いや、さっぱり覚えとらんなあ」と、しきりに他人のものでも感心するようなようだった。食うためやったからな、と先生は小さく言われた。

「経済的自立のないところに、精神的独立は絶対にならない、と私は信じている。……まだ学生で親がかりであったときから、私はただそれだけを一筋に生きてきたようなものであった」と、先生は「ぼらのへそ」に書かれているが、先生を支えた根本はこれだ、とぼくは思う。

「稚心を去れ」という景岳橋本左内十五歳のときの筆という「啓発録」冒頭の一句も、先生は終生其感を寄せておられたように思うが、これも経済的、精神的独立への気概という面からであったとぼくは推測したい。

その後ぼくは定期的には、「中野好夫集」の仕事で先生の最晩年に接することになる。全十一巻、刊行は一九八四年一月からであった。

原水禁問題、教科書検定問題、金大中事件、反核など、先生の対社会的関心と行動はいささかも衰えてはいなかったが、あいかわらず応接間では、気楽な座談が絶えなかった。ジャック・カロ、ゴヤ、ピラネージ、司馬江漢、レンブラントなどの版画を入手すると、先生は見せてくれた。それらの好みに、たしかに先生ご自身が反映していると思われる。リアリストックで、ときにデモニッシュで、しかも精神的な美感が漂う、腕のたしかなそれらの作品を、先生はあっさりとした態度で好んでおられた。これも馬琴のいわゆる「悪文をひさいで良書を購う」式の、厩大な蔵書ともども先生の生きた証なのであろう。しゃれたひとなのである。

ところで蔵書といえ、先生の蔵書にはおのずからに貸したがるものものの序列があるようで、そ

れは傍からは容易にはわからない。たとえばスイフトやシェイクスピア関係のものなど、仕事上どうしても挿入写真が必要なので拝借しようとしても、どこか二の足を踏んでおられる。そこで、それではカメラマンを連れてきましょうと、後日機材をひろげ大々的に撮影しはじめると、先生は浮き浮きとして見ておられるが、予想以上に日数や一部始終に手がかかるのが了解されたく、次の機会には今度は心なしか思い切りよく、持っていいと言おう。ぼくがおもむろに紙片を取り出し借用証を書きはじめると、うん、それだそれだという気配で見守っておられ、書きおわって頭をあげると、少々照れたように、まあそこに置いとけ、と言おう。後日借用ものの返却に及ぶと、そのあたりにころがっていた借用証を誤またず取りあげ、「ほな、これ破るところか」とたいへん上機嫌に言われ、ビリビリと裂いてみせたりもした。

しかし最晩年は、雑誌「新潮」の「司馬江漢雑考」の連載もおえられた先生にとっては、著作集よりむしろギボンの「ローマ帝国衰亡史」の翻訳のほうが、はるかに重要だったであろう。先生のことを英文学から晩年やはり日本にかえたなどという人もいるが、それは「蘆花」の印象のおそらく重いせいで、事実は端的、現にギボンで英文学、もとの巢にかえておられる。

先生はもとより学者で、文学や歴史にかかわる知的な仕事でも、また現実の社会問題への取組みでも、基本のところは「アカデミックにきちっとやる」（丸山真男氏）かたで、それは編集者などしていると実によくわかるのだが、翻訳という仕事は、そういうなかでもまたなかなか面白い位置どり

を占めていたとぼくは思う。かつて読書会をとみにされた西川正身氏も、先生が「辞書を引く労を惜しむ人ではけっしてない」ことを強調されると同時に、しかも「つねに文章全体の意味を的確に把握する読みの深さに感嘆させられた」と書いておられるが、読みの深さという点は、単に語学上のことだけにとどまらず、人間心理や歴史事象の読み取り方とたいへん密接にかかわっていたとぼくは思う。これはもともと誤訳を防ぐという基本の機能から発するものであろうが、ことに「ローマ帝国衰亡史」の翻訳などでは、蓄積されたあらゆる歴史的知識、教養、またことにシェイクスピア、スウィフトなどへの親炙も含めた、長年培った人間認識、心理分析を、先生は日常的に総動員されていたと思うし、また逆に、そうしたエクササイズ、刀の研ぎすまし方が、現実の大小の社会問題に向かう実践の場でつねに有力に機能したことは疑いないとぼくは思う。

翻訳のみならずそのような知識、教養と現実の往還は、当人にとって苦労ではあろうがしかし、楽しくはなかつたにちがいない。その意味では先生は生に執着されたと思う。

先生が最晩年も、反核や平和運動などで社会的活動をつづけられていたのは、あまりに周知のこと。先生七十七歳の一九八一年からは、毎年、平和行進にも、ある一日を選んで参加されていたという。八年といえ、ふるく平和問題談話会、憲法問題研究会をへて、その後も一貫して先生の敬愛する友人であったと思われる吉野源三郎氏が、亡くなられた年である。偶然の一致とも思われぬ。

先生がお亡くなりになって、出棺という日、寒いが静かに光を浴びた街をお宅のほうに歩を運びな

がら、ぼくはこの街ももうそうそう来ることもないのだろうな、と思った。

その後しばらくしてぼくは、沖繩と徳島に旅をした。

沖繩は我部政男氏のご案内で本島を回った。中野先生の足跡を訪れる旅でもあった。石川岳のびやかにひろがる中腹を我部氏が指し示しながら、先生はあそこ一帯を牧場にしたらいいと言っておられた、と説明してくれたとき、ぼくは九州の旅を強く思い出していた。そして先生の面目があらわれているな、と思った。沖繩が経済的にも自立してゆく基盤をつくるべきだというお考えで、先生が沖繩の気候にあった柑橘類の品種を探しておられたという話や、先生の息子さんが小学生だかのとき、スズメをとって飼おうと庭にザルの仕掛けをしているのへ先生が、「そんなもん飼うよりミツバチでも飼ったらどうだ」と言われたとかいう微笑ましい話も、自然思い合わされた。

先生が浄瑠璃と遊芸の街であったと言い表わし、先生数えの二歳から十八歳の春までの幼少年期を過ごしたという四国の徳島市には、偶然の機縁で行った。地図を片手に、先生の「主人公のいない自伝」中の具体的な手がかりは、一応ほとんど回って見たつもりだが、打ち水のあとなど実に美しい色彩を鮮やかにみせたという、家の礎石や敷石などに使われた青石、新町川、助任川のゆったりとした水の流れ、富田橋、新町橋、助任橋、また城山公園沿いの艶なる風情の柳の並木、阿波藍の心を奪う美しさなどをわずかに結んでいくだけでも、阿波盆踊りの鳥追い姿を見ぬまでも、先生後年の趣味の

ひろさの由縁がしのばれもした。趣味ともなればおのずからすでにしてテーマは別だが、世代責任というものを強く踏まえた、それでいてしゃれた人生の、大きな人間的振幅こそ、先生の真面目だったのではあるまいか。